

英語：「話す」から「表現する」へ ～主体的な自己表現への支援～

1 MAPを生かした指導の工夫

コミュニケーション能力が重視されるなかで、この授業では受信にとどまらず、発信を目的に授業を展開している。1年間を「話す」→「表現する」→「議論する」と発展させることを目標に掲げている。体験学習法のスキルを数多く身に付けているALT（外国語指導助手）とのTTはJTE（日本人教師）にも常に大きな学びとなる。

2 教科・単元名 LL・ABC News (Tony Blair goes to America)

3 指導対象学年 2学年

4 単元の目標

(1) 教科としての目標

時期は上記の「中盤」から「後半」へ、すなわち「表現」から「議論」への過渡期の設定である。現在の時事問題に目を向ける態度を養うと同時に、その題材に対する日本のかかわり方について個人の意見を出し、グループの意見を集約し、さらに発表する機会をもつ。それ以降の後半で行う「議論」への準備段階とする。

(2) MAP導入のねらい

ABC Newsの映像を「字幕なし」「英語字幕」「日本語字幕」と段階的に見せることで、分ろうとする姿勢、そして分かったという体験が体験学習サイクルとして回るよう支援する。また、題材に関する周辺知識を主体的に学べるような宿題を設定し、次時にグループで話し合いグループの意見として全体に発表する。自分のグループへのかかわり、グループ同士のかかわりについてもFVCの観点から何かを気付かせたい。

5 指導に当たって

教員からの発言はすべて英語で行われ、生徒にも授業中にできる限り英語を使うことを奨励している。生徒には、主体的に話そうという姿勢がみられ、この時期はさらに自分の意見を述べる、他人の意見について質問するなど、さらに上の段階へステップアップする動機付けの意味合いも含んでいる。

6 単元の指導計画（2時間）

小単元	時数	学 習 内 容
導入 (本時)	1	ニュースを見て内容を理解する。それに関連する日本の立場について自分の考えを述べる宿題をする。
発表 (本時)	1	準備してきた意見をグループ内で共有し、それをグループごと全体に発表する。

7 本時の指導

(1) 本時のねらい

「分からなかったことが分かるようになる」「個からグループへ、そして全体へ」という漸進的なアプローチから自分に返ってくるものを学ぶ。

(2) 指導に当たって 積極的なかかわりを促すような指導を心掛ける。

(3) 授業の展開 (2時間)

	学 習 内 容	生 徒 の 活 動
導入1 (10分)	挨拶・本時の説明 単語チェック 単語の発音	ブッシュ大統領, プレア首相について知っていること, 知らないことを共有する。 プリントの英語を日本語と一致させる。 意味を確認しながら, ALTに続いて発音する。
展開1 (30分)	聞き取り① 聞き取り② 答え合わせ 聞き取り③ 聞き取り④ 読み	映像を見ないで聞き, 単語チェックのプリントをもとに聞き取ることでできた単語をチェックする。 映像を見ながらプリントの空所を埋める。 大きな紙に答えを書いたものを提示し, 全体で確認する。 英語の字幕付きの映像を見て, 理解する。 日本語の字幕付きの映像を見て, 理解を完全なものにする。 斉読 (Shadowing)。 二人組になって, レポーターとプレア首相に分かれて読む。
まとめ1 (10分)	宿題の提示 次時の予告	日本の役割—自衛隊派遣 についてのプリントを宿題に出す。 (英語の学習を通して時事問題にも目を向けさせ, さらに, 日常のフルバリューについても考えさせることをねらいとする)
導入2 (10分)	挨拶・本時の説明 情報の提示 宿題の完成	この時間の流れを確認する。「イラクへの自衛隊の派遣について」宿題をしてきたかどうかをグループ内で確認する。 題材に関連するニュースでどのような展開があったかを情報として出し合う。(日本語で行い活発な意見の交換の準備とする) グループでの討議に入るに当たり宿題を完成させる。
展開2 (35分)	グループ分け グループ討議 発表 他グループへの質問	任意に3~4人ずつのグループをつくる。 与えられた主題についてグループ内で討議し, グループの意見として3つに絞る。(英語を奨励するが日本語も可) グループごとに前に出て, それらの主題について一人ずつグループの意見として発表する。 他のグループの発表を聞きながらメモをとり, グループごとに質問する。それに対して, 発表したグループは答えられるよう最大限の努力をする。
まとめ2 (5分)	内容の確認	各グループからの発表のあとで, 再度自分の意見を考える。それが授業の始めと同じものであったか, 違うものになったか, 自らで振り返る。 最後に前時に見たプレア首相と英国議会との対立に立ち戻り, その対立がみられる場面が他にはないか考える。

教師の働き掛け（MAPを導入したねらい）	MAPの考え方を生かした指導の留意点
<p>今世界で何が起きているかに目を向ける題材であることを伝える。</p> <p>友人と確認しあいながら進めるよう指示。（周囲の生徒との相談を奨励する）</p> <p>JTEも机間支援し、活動の様子を観る。</p>	<p>単語の確認では、一見すると分かりにくい単語であっても、題材に関連づけて類推をすると答えがみえてくることを、友人との協力の中で見付けさせる。（他人の意見を受け入れることを習慣化させる）</p> <p>取組の様子、準備状況などをみる。</p>
<p>常に生徒の動機付けを促す声を掛け続ける。（教材に1度だけ触れただけで理解不十分のまま次の段階に進むと生徒の意欲が低下することもある。さまざまなアプローチを通して飽きさせることなくその教材が染みこんでいくよう工夫している）</p> <p>Shadowing：抑揚、強弱を含め、感情面に焦点を当てて読み、状況を鮮明に理解する。</p>	<p>「ええ!?絶対無理…できないじゃない」という反応から始まるとそれは課題解決の第一歩となる。それを解決していく過程で何が起ころのか、どんな学びがあるのかをみる。</p> <p>この展開1の中だけでも段階を踏むことによって、分からなかった自分、分かろうとした自分、そして分かった自分、という体験学習サイクルが回転している。</p>
<p>プリントを配布し、次時はグループで討議をし、全体に発表することを指示する。</p>	<p>宿題をしてもらうことが、グループでの積極的なかわりへとつながる。迷惑にならないように。（この投げ掛けにも目標設定やFVCを意識させている）</p>
<p>ニュースで扱われる専門用語などについて必要に応じて触れる。</p> <p>宿題の状況をみながら、完成の時間で自分の意見を述べられるよう準備を支援する。</p>	<p>グループでの討議、および発表がこの時間でのポイントになるので、アイスブレイキング的に自然に英語が話される雰囲気づくりに留意する。</p>
<p>個人から出てきた意見を集約する際に「同じだから」ではなく、どんな観点からそれを考えたのかを確認しながら、絞り込んでいくよう指示する。</p> <p>発表に際しては、ALTが全体に見えるようにメモをとり、JTEが必要に応じて伝えたいことの補足などの支援をする。</p> <p>最大限の努力で、何とか答えられる範囲での質問をする。</p>	<p>意見が出やすいように、グループ内での失敗を恐れるカベが低くてすむように任意のメンバーにした。また、宿題として不十分だった生徒も参加できるよう3～4人ずつにした。</p> <p>1人からペアへ、次に3～4人のグループへ、そしてクラス全体へとかかわりを広げていく。このようなかかわり方を通して常にFVCを意識させ「聞いてもらう」「聞かせてもらう」というスタンスで、他グループの発表も積極的に聞き意見を述べる態度を養う。</p>
<p>自分の意見がグループ内にどう反映され、また全体ではどのような位置付けになったか、振り返らせる。必要に応じて机間支援をし、個別に意見・感想などを聞く。</p> <p>この場面を別な場面に置き換えることができないか問い掛ける。</p>	<p>考える前とグループ・全体からの情報を得たあとの自分から、この時間で体験学習サイクルが回るような支援をする。</p> <p>また、前時からのつながりでその一番始めに立ち返ることでこの題材全体を通しての体験学習サイクルが回り、適用の場面への足掛かりとする。</p>

(4) 評価

- ・分からない箇所を友人と協力して解決する努力をしたか。
- ・単語の理解度・発音などは十分であったか。
- ・聞き取り・読みなどに積極的に取り組んだか。
- ・宿題への取組は十分であったか。
- ・現在のニュース（時事問題）に積極的に耳を傾けているか。
- ・グループ内の討議に積極的にかかわれたか。
- ・グループ内の討議で他人の意見を尊重できたか。
- ・発表の際に聞き手に分かりやすい提示ができたか。
- ・他のグループの発表を聞き、適切な質問ができたか。
- ・発表前と発表後の自分の意見の違いを理解できたか。
- ・この場面を他の場面に置き換えて考えることができたか。

8 MAPを生かした効果、まとめ、考察等

ここではBS1で放送されているNEWS SHOWERという題材を利用した。1時間目ではニュース映像を段階的に使うことで、英語についての体験学習サイクルを回し、2時間目ではイラクへの自衛隊派遣をテーマにグループでディスカッションを行うことで、日本のあり方や時事問題に目を向けさせると同時に、「では、これまでの自分とこれからの自分はどうなのか」という人とかかわる上での日常のフルバリューに立ち返らせることもねらいとしている。

ALTとの授業を通して感じることは、体験的な要素を非常に重要視しているということである。毎回の組み立ての中に、アイスブレイキング的な、またお互いにコミュニケーションを取り合うアプローチがあり、生徒の状況（GRABBS）を常に意識しながら授業を展開している。我々も見習うべきものであろう（もちろんこれはアクティビティを伴うものではない）。ALTの授業の展開例を他の教科の先生方に見ていただくことも、教科にMAPを取り入れる点で一つの大きなヒントとなり得る。

「体験学習サイクルを回す」というのは、「前の授業のつながりから引っ張ってくる」「できないと思っていたことが今できている」などの場面に焦点を当て、その過程を振り返らせることである。ここでは2時間を一区切りとした展開例を示したが、体験学習サイクルは一つの活動ごと（例えば展開1）でも、また1時間でも、そして全体の2時間でもいろいろな大きさを回っているということが出来る。またそれは生徒個人の中で回るものでもあるし、同時にグループごとにまた全体でも回るものである。

授業中の活動ではグループ分けなどに注意をしている。一つの課を数時間かけて長期的にやっていくときは、こちらから指定して男女比などをバランスよく配分してグループをつくり、その中でのコミュニケーションスキルを上げるアクティビティから入ることもある。ただ今回のように2時間の展開では、英語を話す際に間違いを恐れない環境を早めに設定し、活発な意見交換ができるよう生徒に任せてグループをつくらせることが多い。ただしこれは、「仲間はずれ」などが無いという状況をみた上でのグループ分けであることを付け加える。同時に将来的にはどんなメンバーとでもエラーのできる環境づくりをしていかなければならないとも強く思っている。